

4 歯科技工実習の評価基準の改訂

○丸山 満, 中澤孝敏, 伊藤圭一

明倫短期大学 歯科技工士学科

keywords : ルーブリック, 歯科技工実習, 有床義歯技工学

はじめに

一昨年、技工技術の学習到達度を評価するため、ルーブリックによる評価基準を策定した。その評価基準（以下：旧評価基準）を用いて、有床義歯技工学実習を担当する3名の教員が、上下全部床義歯を評価した。評価は可能であったが、教員間で評価値に差が見られた。そのため、評価項目の見直しと各項目の到達目標を教員間で再検討する必要性を認められた¹⁾。

そこで、旧評価基準を基に評価基準を改訂し（以後：新評価基準）、実習課題を評価した。その評価結果が、旧評価基準より適切に改訂されたのか検討した結果を報告した。

対象および方法

・課題と項目

旧評価基準と同様、全部床義歯の人工歯排列から歯肉形成を対象とした。

旧評価基準の4分類18項目に対し、新評価基準は4分類6項目とした。

・評価方法

各項目について3名の実習担当教員が評価を行った。評価結果は旧評価基準と同様に、Aが最も高評価で技術レベルが高く4点、次いでB：3点、C：2点、D：1点、不合格：0点の5段階評価を点数化した。

・評価基準の検討

教員の評価結果間に“2”以上の差がある項目は評価結果にばらつきがあると規定した。新旧評価基準全体および各項目の評価のばらつきを比較検討した。

結果および考察

3名の実習担当教員が評価を行うことができた。

また、全体のばらつきは、旧評価基準の263に対し新評価基準は34で統計上有意味な差が認められた。

項目別では、旧評価基準の18項目を新評価基準と同様に6項目に再分類化して検討した結果、前歯部排列、臼歯部排列、咬合接触、口蓋皺壁の形成に有意な差が認められた。

新評価基準の各項目は、「どこまで技術到達しているのか」評価可能となるように段階的に整理、集約化し、適切な図を配置することでより具体性を向上させた。

この評価項目の集約化から、各項目が技術到達レベルを段階的に容易に評価できる基準となった。それが評価のばらつきの収束をもたらした。適切な評価に繋がり、適切に評価基準を改訂できたと考えられた。

まとめ

改訂した新評価基準で評価は可能であった。新旧評価基準を検討した結果、評価全体および4項目について教員間の評価に収束がみられ、適切な評価基準に改訂できた。評価基準の作成には、評価者間に個人差が生ずることが無い様、技術到達レベルを具体化できる評価項目と、段階的評価基準が評価基準の作成に肝要といえる。

今後も、学生にフィードバックできる評価基準を目指すと共に、教育への導入方法も含め、検討を重ねていきたい。

参考文献

- 1) 丸山 満, 中澤孝敏, 佐々木聡, 野村章子, 有床義歯技工実習における評価基準案について, 明倫歯誌, 16, 86-92, 2013